

群 集 事 な か ば

鈴 木 時 夫

T. Suzuki: Nomenklatorische Probleme über die Assoziation in meinem
Forschungsleben.

長く懸案となっていた植生単位の命名規約の草案が、このほどできあがった。来る4月11日、西ドイツのRintelnで翌日から3日間行なわれる「フレッウナと植生のシンポジウム」参集者有志による討論会が開かれる。私は、Géhu教授からフランス文草案⁽¹⁾を取りよせて日本訳をおわった。今、Moravic教授から送付されたドイツ文草案⁽²⁾と比較して、検討中である。検討をおわったら、日本訳⁽³⁾を日本の植生研究者のためにどこかの雑誌に発表したいと思っている。今回は私の研究生生活において、命名法に関係した問題をひろい上げて書きとめることとする。

生態学の研究法については私はBraun-Blanquet⁽⁴⁾の影響を最も多く受けたが、戦前および戦後のある期間、Du Rietz⁽⁵⁾⁽⁶⁾の影響もある程度受け、植生単位にラテン名を用いることや先取権についてやや批判的となり、1940年代の後半ころは群集のラテン命名をさしひかえたこともあった。しかし、その後、国際的統一のためにはラテン語の命名が歴史もあり、分類学で長く検討してきた範型(タイプ)方式や先取権は学界の秩序のため必要であると考えようになった。その心境は「群集事始め」の中にうかがわれると思う。

1. チシマザサ・オクノカンスゲ群集はチシマザサ・ミヤマカンスゲ群集と改称する

Carici multifoliae-Sasetum kurilensis (Suz.-Tok., Yuhki, Ooki et Kanayama)
Suz.-Tok., nom. nov. fide Fujiwara=Cariceto-Sasetum kurilensis Suz.-Tok.,
Yuhki, Kanayama et Ooki 1956⁽⁷⁾ p.172. 第8表=Carici-Sasetum kurilensis
Suz.-Tok. 1966⁽⁸⁾ 範型測定: G212-月山の姥岳 1450m

1971年5月23日、私は藤原一絵氏の訪問を受け、月山でチシマザサと混生しているスゲはミヤマカンスゲでオクノカンスゲではない、私のチシマザサ・オクノカンスゲ群集の範型測定はどこかとたずねられた。範型測定は湯殿山に近い姥岳で私が調査した。スゲは結城嘉美氏が少し問題があるといったが、私がオクノカンスゲと同定した。野帳に標本番号も書いてあったのでさがしてみたら標本もでてきた。よくみると正しくミヤマカンスゲである。尾瀬や立山でのミヤマカンスゲの生育地ともつながる。ブナやハイマツにおおわれていても、チシマザサの階層の下にミヤマカンスゲが生育していた。私の検定まちがいである。

命名規約の第8章: 名称の訂正, 第43条: 名称を与えている分類群の検定のあやまりによる植生単位の名称は訂正されなければならない。藤原氏の御教示に感謝し上記の通り訂正する。

2. ケヤキ・ヒメウワバミソウ群集の原表を訂正し、ヒメウワバミソウを加える

Pellionio-Zelkovetum serratae Suz.-Tok. 1975⁽⁹⁾ 範型測定：阿蘇菊池水源深葉国有林 600~1000m 谷 - AZ 24, 25, 29 - ヒメウワバミソウ *Pellionia umbellatum* Bl. + を AZ 24, 25, 29 に加えサンショウズル *Pellionia minima* Makino AZ 24, 25 の + をとる。 - fide Kunio Suzuki

1976年2月9日付書信で横浜国立大学植生研究室の鈴木邦雄氏から、ケヤキ・ヒメウワバミソウ群集の原表にヒメウワバミソウの記載がないという注意を受けた。野帳⁽¹⁰⁾を調査したところ、ヒメウワバミソウもサンショウズルも両方生育していることがわかった。原表を上記の通り訂正する。3 測定の全部に存在しているので群集名にとり入れたが、原稿をタイプする時、おとしたものと思う。この訂正がないと、この群集は第3条 d によって正当に発表されたことにならない。鈴木邦雄氏に感謝し原表を訂正する。

3. スダシイ・コバノカナワラビ群集はスダシイ・ヤブコウジ群集の異名である。

Bladhio Shiietum sieboldii (Suz.-Tok. et Hattiya) Suz.-Tok. 1952⁽¹¹⁾,
Suz.-Tok. 1966⁽⁸⁾ = Shiietum bladhiosum sieboldi Suz.-Tok. et Hattiya
1951⁽¹²⁾ 範型：第3表イ, 2, 3, 5, 10, 11, 12, 13, 14, - 伊豆半島 300m 以下
= Shiietum rumorohsum sieboldi Suz.-Tok. et Wada⁽¹³⁾

房総半島南部を和田克之氏と調査したところ、コバノカナワラビがスダシイとよくむすびつくような結果がでた。それで、用意していたスダシイ・ヒサカキ群叢という名称をやめて、スダシイ・コバノカナワラビ群集として発表した。しかし、調査を房総半島中北部・伊豆半島・東海地方に拡大していくと、コバノカナワラビはいよいよ標徴種でないことがわかった。そこで伊豆半島を範型地とするスダシイ・ヤブコウジ群集の異名とし、その後スダシイ・コバノカナワラビ群集という名称を正当化する取扱いをしていないので、日本語や英語の命名は早いですが、スダシイ・コバノカナワラビ群集の方を異名とする。1966年の訂正は正書法上の語尾訂正であるので典拠は1952の「東亜の森林植生」までさかのぼる。

4. ブナ林の命名について

第三紀末から第四紀にかけて地球上に気候の変動がおこり、フロラとしても、植生としても移動がおこった。この間海陸の相対的上昇、下降がおこり、日本列島と大陸との間、島と島との間もつながったりはなれたりした。日本海が湖のようになったり、海流が日本海に入るようになったりした。火山活動や人類文化も、第四紀に入ってから植生に重要な影響をおよぼしている。先史文化、農耕文化近代重工業文化、封建時代、近代国家と日本の社会的変貌も植生と無関係でない。植生帯をつくる極盛相の自然植生は、この多種多様の自然と文化の営力にきたえられ、安定平衡に近づいた極盛相を形成する植生単位がそれぞれ平行的にその姿をとるにいたったと考えてよいのではなからうか。すると、⁽¹⁴⁾中野の考えた群団位になってくる。営力の植生にはたらく鍛練圧は、環境要因の中で生活のため不

足することの大きいほどきびしくはたらく。群集間の限界は、分布境界としても組成的特徴としても鮮明になってくる。日本海側の気候型と太平洋側の気候型が対立しているということは、日本列島成立以来の大陸との関係位置できまることだから、大陸と太平洋が存在した限りでは季節風気候は存在したであろう。しかし、日本海ができて冬の多雪気候ができたのは、暖流が日本海に流れ込むようになってからである。林冠に対して破壊的な機械力となり、林床には生育期間を制限しながら保温効果をもつという雪をともなった風に対して常緑針葉樹と地中植物は前進を阻まれた。落葉広葉樹は、半年間の休眠によって同化系の損傷が最も少く林冠の支配を獲得した。常緑広葉樹は、耐陰性と萌芽性をもつ故に、低木化と地這性の獲得によって林床の積雪の下に潜入していった。イネ科の中で、耐陰性と永年性地下茎栄養繁殖と多巡性の性質をもったササ類は、氷河期以前に日本列島を北進していった象の群にともなって林空に群生していたものが、この多雪気候の森林の下にすみついた。南からきた常緑広葉樹のフロラにまじっていたイヌマキ科とイヌガヤ科が常緑広葉樹と似た生育形をとり、また動物分散によって積雪下越冬生活に入ってしまった。こうしてできたブナ群だからはっきりした二つの群集にわかれるのは自然である。植生単位の花序組成だけからみていくと、この群集は温度と水湿にめぐまれた環境の中で分化していった常緑広葉樹の群集と釣り合いがとれないようにみえ、これを群団に上げようという考えも生まれてくるであろう。私は「東亜の森林植生」から「日本自然林の体系」を経てこの考えを変える必要をみとめない。

⁽¹⁵⁾
Fagion crenatae Nakano 1942 = Sasamorpho-Fagion Miyawaki, Ohba et Murase ⁽¹⁶⁾
⁽¹⁶⁾ Sasaki = Saseto-Fagion crenatae Miyawaki, Ohba et Murase 1964 ⁽¹⁶⁾

⁽¹¹⁾
Typus Sasamorpho-Fagetum crenatae Suz.-Tok. 1952

宮脇らがブナ林を二つの群団にわけるのは見解の相違であるが、昇格によって範型群集を消してはいけな。ブナ・スズタケ群集は歴史の古い名称であるが、日本語の文献ではブナ・スズタケ群叢という名称が1930年にでている。正宗巖敬はこの名称を厳密な組成的な意味でなしに、ブナ・ササ型森林の意味に使うことを提唱しているが、共に充分な記載はない。群団に二つの群叢があることを記しているが、1930年に名称だけでブナ・スズタケ群叢にふれていない。ブナ・スズタケ群集の正当発表は戦後となる。

⁽¹¹⁾ ⁽⁸⁾
Sasamorpho-Fagetum crenatae Suz.-Tok. 1952, 1966 = Fagetum crenato-japonicae (Yoshioka) Sasaki 1970 ⁽¹⁷⁾
⁽¹⁸⁾ = ブナ・イヌブナ・イヌシデ・カンスゲ群落 吉岡邦二 1952 ⁽¹⁶⁾
⁽¹⁶⁾ = ヤマボウシ・ブナ群集 宮脇・大場・村瀬 1964 範型測定 M4, 5, 20 ⁽¹⁹⁾
?, 22, 34, 35, 36 - 天竜川上流戸中山, 白倉山, 1270~1540 m

群集は「東亜の森林植生」でラテン化され、1960年には正書法的に訂正された。範型の原記載と和名の典拠は1949年の天竜川であるが、和名はここではブナノキ・スズタケ群集となっている。ブナノキというのは猪熊泰三先生の意見であった。この群集を群団にあけても範型を消して新群集をつくることはできないので、ブナ・ヤマボウシ群集を付表によって検討してブナ・スズタケ群集の異

名とする。佐々木⁽¹⁷⁾は宮脇⁽¹⁸⁾らにならってブナ・スズタケ群団をみとめて、ブナ・イヌブナ群集を設けた。しかし吉岡⁽¹⁹⁾にはブナ・イヌブナ・イヌシデ・カンスゲ群落という名称はあるが、ブナ・イヌブナ群落という名称はない。命名規約からは、ブナ・イヌブナ群集という名称をつくる根拠は全くない。

Saso kurilensis-Fagetum crenatae Suz.-Tok.1952,⁽¹¹⁾ 1966,⁽⁸⁾ 1970⁽²⁰⁾ =Lindero-Fagetum crenatae Horikawa et Sasaki=Lindero membranaceae-Fagetum crenatae Sasaki⁽¹⁷⁾ 1970⁽¹⁷⁾ =Abieti-Fagetum crenatae Sasaki 1970⁽¹⁷⁾ 範型測定 1-24⁽²⁶⁾
(-23), 120~720 m. 北海道桧山地方

ブナ・チシマザサ群団をみとめても、範型群集はブナ・チシマザサ群集でこれを消してブナ・オオバクロモジ群集を設けることは根拠がない。ブナ・チシマザサ群集は和名と原表は「東亜の森林植生」でラテン化され、「自然林の体系」で正書法的に訂正された。今回さらに付加語 kurilensis を加える。原表にはチシマザサとクマイザサ(原表記載ネマガリダケ)が記載されているので、どちらのササに群集名が由来しているかを日本人以外の研究者にはっきりわかってもらうためである。

佐々木⁽¹⁷⁾はブナ・クロモジ群集とブナ・オオバクロモジ群集の両方を認めている。この論文には日本のブナ林に関するいろいろな見解が盛り込まれていること、著者自身の日本全国にわたる現地調査の資料に基礎を置いている点で高く評価される。しかし、ササ属とクロモジ属の分類に関する意見や群集分類に関する一貫した考えがどこにあるかとなると理解がむずかしい。とはいっても、生前長くつきあっていた氏のことばや風貌をおもいだすと、紙背の著者の心が私にはわかってくるような気がする。しかし、それは何分にも主観的なことであるので果してそのままにしておいてよいかわからない。ここでは、命名規約を基準として、紙背の人の印象は別に記録しておくこととする。

まず印象に残っている佐々木博士のことばを引用しよう。「ブナ・チシマザサ群集をぶちこわしますよ。いいですか。」「すると、ササはブナ林の植生分類においてどういう意義をもつことになるか。」「ずっと上の階級の標徴種(広い意味、特徴的な分類群)か、ファシースというところでしょうね。」

1948年9月の桧山地方ブナ林調査の時、ブナ林内のクロモジ属の果実は紅熟していた。その標本を手にして、猪熊先生は私を側において館脇先生に話しかけた。「こうしてみると、オオバクロモジはクロモジとはっきりわかれますね。」ブナ林内のすべてのクロモジ属に赤い果実になると確かめたわけではない。この調査には、岡本省吾氏も参加していたが、ここに居あわせた記憶はない。会話は一面私に教えるごとく、一面北海道フロラの大家である館脇先生に樹木学者として語られたような雰囲気であったように思う。大井⁽²¹⁾はオロバクロモジはクロモジの変種とし、区別点は葉の特徴だけで果実はクロモジは黒く熟すると書いています。北村、岡本⁽²²⁾もオオバクロモジを変種としているが、オオバクロモジの果実が黒熟すると記している。倉田⁽²³⁾は、オオバクロモジは葉が大きい日本海岸産の形であるが中間形があって区別できないとしている。

渡島半島は北海道本島にあって、トドマツ林とは地続き接している。ブナ属とモミ属の植物が混合する例は日本にもヨーロッパにもある。しかし、ブナ・チシマザサ群集の桧山地方の測定ではアオト

ドマツの混合は26測定のうちただ1測定、焼木尻岳の帯状横断において若木が1本入っていたとい
 う位めずらしいことである。⁽²⁴⁾ 館脇の北限地帯のブナ林の記載をみても、アオトドマツは尻別川
 流域に散在するだけで、歌才の天然記念物となっているブナ林にもアオトドマツの記録はない。佐々木
 は、19測定において常在度2を記録しているが、少なくとも冬季季節風風上斜面にはそのように多
 く混合することはない。佐々木⁽¹⁷⁾ではクマイザサ・エゾアジサイ・トリアシショウマ・アオトドマツの
 組み合わせがブナ・アオトドマツ群集の標徴種となっているが、私の檜山地方のブナ・チシマザサ群
 集の原表ではエゾアジサイやトリアシショウマは入っていない。しかし、調査中トリアシショウマを
 みかけなかったわけでない。沢に沿って森林が擾乱されたところなどにはかなりはえていたように思
 う。噴火湾側にはトドマツの多いブナ林が普通であるかとも思ったが、⁽²⁵⁾ 宗像をみるとそうでもないら
 しい。佐々木(1964)の表4には北海道フトロの測定24がのっているが、この中にはブナ・アオト
 ドマツ群集の標徴種4種とも⁽¹⁷⁾のっていない。佐々木には *Sasa senanensis* と *S. palmata* がのって
 いる。ササの分類はむずかしい。チシマザサ・チマキザサ・ミヤコザサ・スズタケだけがはっきりわ
 かる森林のササである。オゼササはおそらくチマキザサの湿原形だろう。オクヤマザサもチシマザサ
 の一形にすぎないと思う。檜山地方では北海道のササを研究している館脇先生にササを教えていただ
 くつもりであったが、先生はササはササとしておこうといって即決を避けられた。それで、その分は
 全部 *Sasa palmata* ネマガリダケとなっている。ところが、ウズラのA標準地で猪熊先生がどうも
 チシマザサらしいといわれ、岡本氏もそうですねといわれた。この標本を中井先生にお見せしたとこ
 ろ、「チシマザサそのものでしょう。」と言下に教えて下さった。斜面の上部から尾根はチシマザサ
 沢どおりはネマガリダケとしたチマキザサが優占種であった。混生しているところではチシマザサが
 上、チマキザサが下であった。尾瀬では湿原と沢にオゼササ、山に入るとチシマザサがある。また、
 盆地の周辺にはチシマザサの群生地もあった。月山で、混生した林分で週日の生活測定の時、結城先
 生が根気強く根茎を追跡されたことがあるが、やはりこの関係はくずれていない。*Sasamorpha* は
 あるいは今後あまり使われず *Sasa borealis* がスズタケの学名として通用するかも知れない。命名
 規約には変更名という制度があって、有効に発表された分類群を語根とする植生単位名は、その分類
 群の名称が異名になったからといって棄却したり訂正したりできないことになっている。したがって、
Sasamorpha purpurascens が異名になっても、*Sasamorpha-Fagetum* が棄却されたり、
Saso-Fagetum と訂正してブナ・チシマザサ群集の重複名になったりするおそれはないが、第44条
 変更名 *Nomina mutata* : 最近20年間に植物地理学および分類学で使用されず異名としても引用さ
 れない分類群の名称に由来する植生単位の名称は、訂正のための委員会に提案されると、委員会は変
 更名を公表するであろうとなっている。*Saso-Fagetum crenatae* は檜山地方を範型とし、範型
 となった測定の多くが、チシマザサよりチマキザサの方が多かったということになったとき、和名を
 よく知っている日本人にはわかっても、世界的にみて *Saso-Fagetum crenatae* では *Sasa* はチシ
 マザサか、チマキザサか、ミヤコザサかわからない。そこで付加語 *kurilensis* を添えることにし

たのである。

〔紙背の佐々木博士の心境〕

最後に命名規約から離れて、佐々木博士の心境を私の思うままに書いてみよう。「私は、先取権や範型制度を厳密に規定している命名規約の精神にむしろ同調できない。先取権は歴史の流れに、範型は自然のありのままの姿に従属すべきである。学問は覇権主義では成立しない。皆で力をあわせてつくっていかねばならない。」というところにあつたらしい。「戦後東京にいたという地の利を、鈴木は過度に利用してはいけない。ブナ林では吉岡さんが前からずっと苦勞している。後進の宮脇君にも花をもたせてやれ。世界における東アジアのブナ林の位置づけだけで満足しなさい。中野先生も記念し、薄井君はミヤコザサで、私はクロモジで苦勞しました。」というように思えるのだが。

5. ブナ・カエデ・クラス群の連結母音の訂正

Aceri-Fagea Br.-Bl. et Suz.-Tok., Klassengruppe (orthographisch Korrigiert)=Acero-Fagetea Br.-Bl. et Suz.-Tok.

Acerは第3変化の中性名詞であるので上記のように訂正する。Braun-Blanquet⁽²⁷⁾はクラス群の語尾にクラス同様-eteaをつかった。しかし、Tüxen教授は書面で-eteaはクラス語尾でクラス群の階級語尾は-eaでなければならないと教えてくれた。命名規約にはクラス、亜クラス、オールド、亜オールド、群団、亜群団、群集、亜群集の階級しか規定していないので、クラス群語尾の訂正はTüxen教授の教示による。命名規約によって範型クラスを指定する。

範型クラス: Saso-Fagetea Br.-Bl. et Suz.-Tok. in Suz.-Tok.= Querco-Fagetea japonica Miyawaki⁽⁸⁾

ヨーロッパのQuerco-Fageteaはビレネー、アルプス、カルパチヤ、コーカサス、ヒマラヤなどの東西に連なる山脈が障壁となり、また地中海やカリブ海も障壁となったため、フロラおよび植生の気候変動に伴う移動を妨げ、ヨーロッパ、西アジア、北アメリカ東部では温帯の分類群が絶滅して欠如するにいたった。東アジアでは日本列島で植生移動の通路となったので、分類群の欠損はもっとも少なく、しかも南北移動をくりかえすうちに温帯性の科に落葉性と常緑性の分類群を分化させた。歴史の流れは命名上の範型を周辺部につくりやすいが、学問の発達のためには実質的中心部におく方が望ましい。階級語尾の正書法上の訂正は典拠には無関係である。クラス群名の著者名にBr.-Bl.の名が入っているのは、私がモンベリエを訪問した時、ブナ・チシマザサ群集とブナ・スズタケ群集の表をみせ、「先生はVaccinio-Piceetea (正書法により訂正すればVaccinio-Piceea)のクラス群をつくられたが、日本の群落に対しては次のようなクラス群をつくろうと思います。」という、私の手帳に赤い万年筆で書いてくれたからである。トウヒ・コケモモ・クラス群には先生の命名そのまま、ブナ・カエデ・クラス群には著者名として先生の名を入れ、工藤先生が命名された群集名に因むクス・カシ・クラス群には典拠を括弧に入れて付することにしたい。しかし、もし命名規約が科名にちなむLauraceo-Fagaceae sempervirentesを許さないならば、Machilo-Shi

-iea という名称を考えている。

文 献

- 1) Gehu, J.M. (1976) Traduction française du code de nomenclature phytosociologique, Lille
- 2) Moravic (1976) Code der pflanzensoziologischen Nomenklatur (Entwurf), Praha
- 3) 鈴木時夫 (1976) 仏独対訳植物社会命名規約草案, 鈴木植生研, 蓮田 (未発表)
- 4) Braun-Blanquet, J. (1928) Pflanzensozologie Aufl. 1.
- 5) Du Rietz, G. (1930) Vegetationsforschung auf Soziationsanalytischer Grundlage. Abderhalden Handb. d. biolog. Arbeitsmeth. Abt. XII T. 5, H. 2.
- 6) ——— (1953) in Proceedings of the 7th International Botanical Congress Stockholm 1950
- 7) 鈴木時夫・結城嘉美・大木正夫・金山俊昭 (1956) 月山の植生. 月山朝日山系総合学術調査報告書 172, 第8表, 山形県
- 8) ——— (1966) 日本自然林の植物社会学的体系. 森林立地 8 (1)
- 9) ——— (1975) 阿蘇火山地方の潜在森林植生, 日生態会誌 25 (1): 8, Tab. 6.
- 10) 大分大学学芸学部生態学研究室 (1959) 深葉国有林生態調査資料 (騰写刷)
- 11) 鈴木時夫 (1952) 東亜の森林植生, 古今書院, 東京
- 12) ———・蜂屋欣二 (1951) 伊豆半島の森林植生, 東大農演習林報告 39: 145-169
- 13) ———・和田克之 (1949) 房総半島南部の森林植生, 東大農演習林報告 37: 117-132
- 14) 中野治房 (1942a) 本邦森林植物群落の組成, 植雑, 56: 186-190
- 15) ——— (1942b) 本州落葉闊葉樹帯の森林群落の組成, 植物生態学報 2 (1): 66
- 16) 宮脇昭・大場達之・村瀬信義 (1964) 丹沢山塊の植生, 丹沢/大山学術調査報告, 神奈川県 54-102, 付表
- 17) Sasaki, Y. (1970) Versuch zur systematischen und geographischen Gliederung der japanischen Buchenwaldgesellschaften. Vegetatio 20 (1-4): 214-249
- 18) 吉岡邦二 (1953) 東北地方森林の群落学的研究 第2報 仙台市付近ブナ林地帯の森林, 植物生態学会報 2 (2): 69-75
- 19) 鈴木時夫 (1949) 天竜川上流の温帯林植生 技術研究 1: 77-91, 付図, 付表
- 20) ——— (1970) 白山の植生分布と垂直植生帯, 白山の自然 116, 表3A, B, 石川県
- 21) 大井次三郎 (1965) 日本植物誌 改訂版 3%, 至文堂, 東京

- 22) 北村四郎・岡本省吾(1958) 原色樹木図鑑 95, 保育社, 大阪
- 23) 倉田悟(1971) 原色日本林業樹木図鑑 第3巻 32, pl. 16
- 24) 館脇操(1949) ブナの北限界, 生態学研究 11(1-2):46-51
- 25) 宗像英雄(1975) 北海道南茅部町の植生 13, 南茅部町教育委員会, 函館
- 26) 猪熊泰三・鈴木時夫・岡本省吾(1953) 北海道ブナ林植生調査報告, 第2表, 函館営林局
- 27) Braun-Blanquet, J.(1959) Grundfragen und Aufgaben der Pflanzensoziologie. Vistas in Botany 145-171

〔植物=ニュース〕ここでは、植物の短い観察記録や分布記録など、断片的なニュースを種類ごとにとりあげることにした。手軽にニュースを寄せられるよう期待したい。

① ハコネシダ *Adiantum monochlamys* Eaton 昨年このシダを松本市東部の山地、女鳥羽川上流の谷間に見出した。この種は暖帯の植物であるが県内では伊那谷にあるほか諏訪・北佐久方面からの報告もある。松本の産地は北佐久とともに本県では最北の産地である。(奥原弘人)

② エビラシダ *Gymnocarpium oyamense* Ching 普通は暖帯で見られるシダであるが一昨年松本市の東部山地、薄川上流の谷間で見、昨年また女鳥羽川上流の谷間でも見た。このシダは木曾と下伊那では各地で見られ中信では島々にあり南佐久西部山地からの報告もある。松本の産地は県下最北の産地とみられる。(奥原弘人)

③ オオバノハチジョウシダ *Pteris inaequalis* Bak. var. *aequata* (Miq.) Tagawa 暖帯植物の一つであるこのシダを昨年北安曇郡小谷村の横川谷で見た。場所が海拔800mに近い高地であるためか、または株が若いためか葉長が40cm未満で胞子のうもなかったもので、倉田悟先生に同定をお願いした。このシダの分布は一般には茨城・新潟両県から西とされているが山形県の一部にもはいつているとのことである。県下では下伊那や木曾の暖地でも見られないが普通海岸寄りの暖地に産するというこのシダの特性から日本海に16kmというこの地にも育っているものと考え。横川谷は低地は海拔300mより低いので完全な標本も入手できると思う。(奥原弘人)

④ ギンバイソウ *Deinanthef bifida* Maxim. 関東から西の表日本の暖帯に分布しているこの草が一昨年松本市の薄川上流の谷間にあるのを見、昨年またその北隣の女鳥羽川上流の谷間にもあるのを見た。この草は伊那谷や木曾谷では各地で見られ先年木曾と塩尻市との境でも見ているが松本は最北の産地とみられる。(奥原弘人)

⑤ クロビイタヤ *Acer miyabei* Maxim. このカエデの主産地は北海道と東北地方であり菅平にも多い。一昨然大町市中綱湖南西の林縁にあるのを見た。他の高木の陰になって十分な生長振りではなかったが果実を見ることはできた。分布の南限であり西限であるとみられる。この湖や木崎湖の周辺は湿潤を好むこのカエデにとっては適地とみられるので開拓前には多くあったものと考えられる。(奥原弘人)